

金融分野におけるAI活用

金融業界においてAIの活用が進んでいる。特に「リスクアセスメント」「金融市場分析・調査」「投資・ポートフォリオ管理」などの分野で活用事例が増えている。今のところ業務改善といったところが中心だが、今後は、金融機関自身がその役割の変革を求められる中で、新たに打ち出す事業への活用が期待されるであろう。

高まるAIへの期待と投資

AI（人工知能）に対する注目度・期待度が高まっている。米国調査会社CBインサイツの「AI ANNUAL GLOBAL FINANCING HISTORY」によれば、ベンチャーキャピタルのAI投資金額は過去5年で約8.5倍（2012年の5億8,900万ドルから16年の50億2,100万ドルへ）、投資先企業数は約4.7倍（12年の150社から16年の698社へ）に増加している。グーグルの持株会社アルファベットなど大手IT企業もAI関連企業の買収に力を入れている。

こうした中、金融業界のAI投資も活発である。米国IT専門調査会社のIDC社によれば、16年のAI支出約60億ドルのうち4分の1は金融機関からであったという。またKPMG社も、AI投資が最も多いのが金融業界で、2020年には100億ドル規模になると予測している。

過去、「ゴールドマン・サックスが、証券取引の自動化で、600名いたトレーダーを2名まで削減した」という事例があり、自動化を加速させるAIに対して期待が高まるのも当然のことだろう。

金融分野でのAI活用事例

金融業界において、AIの活用事例が増えている分野としては「リスクアセスメント（ローン審査含む）」「金融市場分析・調査」「投資・ポートフォリオ管理」が挙げられる。

1. リスクアセスメント

リスクアセスメント分野のAIを提供するベンダーに

は、AdviceRobo社、CreamFinance社、OutsideIQ社などがある。

OutsideIQ社の「DDIQ」というAIソリューションは、投資銀行トップ5のうち、既に3行が利用している。DDIQの特徴は、法人・個人のリスクアセスメントに必要なプロファイリングを、パブリックなデータソースだけでなく、クローズドな専門データソースも検索対象とし、自動的に検索・調査・整理・作成するところにある。人間であれば1週間かかるアセスメントのレポートを数分で完成させてしまう。

2. 金融市場分析・調査

金融市場分析・調査分野のAIでは、大手金融機関が多数出資するKensho社が有名である。そのほか、Alpha-Sense社、Lucena Research社、AmenityAnalytics社など多くのベンダーが参入し始めている。

Kensho社の「ウォーレン（Warren）」は、「金融版のSiri」を標榜するチャットボット型のAIソリューションである。「原油価格が10%下落した場合、S&P500への影響は？」といった自然言語で問い合わせることができる。さらに、特定のイベントに対する特定銘柄のパフォーマンスや、特定のアセットと他のアセットの相互作用・相互関係を瞬時に計算する能力も備えている。

3. 投資・ポートフォリオ管理

この分野は、ロボ・アドバイザーの台頭が目覚しいが、AIが顧客に直接アドバイスをするというものはほとんどない。AIの中心は顧客へアドバイスするフィナンシャル・プランナー（FP）向けのものである。

ForwardLane社のサービスでは、FPは顧客と電話しながら、チャットでAIにアドバイスを求めることが

できる。「顧客Aにどんなポートフォリオを推奨すべきか？」と聞けば、その顧客の現在のポートフォリオや投資嗜好などを考慮し、推奨ポートフォリオを瞬時に表示してくれる。従来であれば、準備に8時間はかかっていたような作業である。

また、ForwardLaneは、会話のきっかけとなる話題をさまざまな情報（ニュースやアナリストレポート、企業の決算報告書など）から自動的に抽出する機能も備えている。朝、ForwardLaneを起動すると、その日の話題が一覧で表示され、その中からもっと詳しく知りたい話題があれば、チャットボットに聞くことができる。さらに、その話題に市場がポジティブに反応するのか、ネガティブに反応するのか、その理由なども提示してくれる。

FPはこれまで情報入手や準備に費やしていた時間を、顧客との会話の充実に使えるようになる。

AIによって変わる金融業

事例で見られるように、金融機関のAI活用は、今のところ業務改善といったところで進んでいる。しかし今後は、金融機関自身がその役割の変革を求められる中で、新たに打ち出す事業への活用が期待されるであろう。

「朝起きると、スマートフォンの待ち受け画面に、当日の予算と節約可能な金額がメッセージとして表示されている。このところ3日続けて予算をオーバーしているので、『このままの生活を続けていると、年末の家族旅行は中止にしなければ』とAIアドバイザーは脅してくる。来年には娘が大学受験を控えている。私立大学の理系志望なので、AIアドバイザーは『資産を切り崩す必要がある』という。少し前から推奨された投資を始めたので、

老後の心配は今のところなさそうだ。しかし、子どもが大学を卒業するまでは、大きな出費は控えるよう強くアドバイスされている。ここは従ったほうがよいだろう。」

これは、5年後の金融サービスをイメージしたものだ。金融サービスは、AIによって生活者により身近な「PFA（Personal Financial Advisor）」と呼ばれるような存在に進化する。

お金の問題は複雑な判断が必要になることも多い。「人生100年時代」ともなれば、将来の収入や支出の予測はより困難になる。だからといって人間のアドバイザーに常時アドバイスを求めることは、一般の生活者からすれば時間的にも金銭的にも難しい。そうした生活者のニーズやウォンツに応える金融サービスはいずれ必要になる。

AIは、「自動化」「パーソナライゼーション」「リアルタイム」を実現する。「自動化」はあらかじめ決まったルールに従う自動化ではなく、人の認識や思考の部分にまで拡張され、「パーソナライゼーション」は人によるデータ分析ではなく、機械学習による圧倒的な計算量により、よりきめ細かく、より「リアルタイム」に顧客に適した情報やアドバイスを行うことを可能にしていく。

AIの活用を進めるためには、「自動化」「パーソナライゼーション」「リアルタイム」といったAIの適正や実現可能なレベルを十分に理解することが必要だ。その上で、それらを活かした革新的な金融サービスを創造していくことが今後の金融機関には求められていくだろう。

Writer's Profile



田中 達雄 Tatsuo Tanaka

リテールソリューション企画部
シニアITアナリスト
専門はCX、FinTechなど
focus@nri.co.jp